

興福寺蔵「興福寺維摩会料当国不足米餅等定案」紙背文書

「興福寺維摩会料当国不足米餅等定案」の体裁は次の如くである。袋綴、寸法 30×29cm 料紙楮紙、(反古裏)、紙数15枚(本紙のみ、表紙別)、表紙後補、「興福寺印」の方朱印あり。本書の内容は興福寺領から差出すべき維摩会料米餅等の員数を各庄園別に書上げると共に、その収納状況を記したものである。これによつて「三大会」の一つたる興福寺維摩会の費用等の徴集方法の一端が知られるのみでなく、一種の興福寺領庄園目録としても役立て得るものである。本書が書かれたのは次の奥書によつても知られる如く、弘安八年のことである。

「弘安八年五月廿日書写之畢、以朝忍之本令交合相伝之本、被食虫之故也

都 維 那(花押)」

しかし本書の内容は、右の奥書からも知られるように、弘安八年よりかなり以前の状態を示すもののようである。本文の終りには「自和銅七年至正治二年四百八十五年也」と記されており、本書の底本が書かれたのは少くともこの正治二年(1200)以前のことである。又本文中にも建久五年(1194)、同六年(1195)のことを記している箇所が見られる。従つて本書の底本が成立したのは建久六年乃至正治二年の間で、この内容もその頃の状態を表しているものと考えられる。

次に本書の紙背文書について述べる。紙背文書15通の中で、年月日

「興福寺維摩会料当国不足米餅等定案」紙背文書

の明記されているのは第十一紙の弘安六年三月廿五日秋季御八講進物送状一通のみである。しかし本書の書写は前述の如く弘安八年五月廿日であるから、紙背文書の年代は当然それ以前に属することになる。恐らくは弘安年間乃至それを若干溯る位の年代と考えてよいのであろう。

第一、二、三、十五紙の四通は博奕の一種「四一半」に関する文書である。中でも特に第二、三、十五紙の三通は四一半に際しての借錢の催促に関する相論文書で、訴訟としては雑務沙汰に属するものである。この訴訟は興福寺に於て裁かれたもののようであるが、鎌倉幕府のものとはより、他の機関におけるものであつても、鎌倉時代の雑務沙汰関係文書は他の訴訟関係文書(所務沙汰、検断沙汰)とは異り、残存例は極めて乏しいのが現状である。それ故これ等は数少い雑務沙汰関係文書の一つとして重要な史料と言えよう。第一紙は又一乗院漆工の座に関する文書でもある。第二、三紙にはそれぞれ「同宿之上、依為一和尚触遣子細之処」、「同宿上、依為当山一和尚、以書状度々触遣子細之処」とあるが、これは当時の寺院内部の組織を知る上に一つの手懸りともなるであろう。しかもこれ等は第十五紙の文書と共に、当時の僧侶の生活の一面を具体的に示してくれるものである。又第十四紙は為替の史料である。

本書は本文、紙背文書共に興味のあるものであるが、紙数の関係から紹介するのは紙背文書に止め、表の本文は割愛せざるを得なかつた。

(田中 稔)

○ 紙背文書

(第一紙) 一乗院家新座漆工影宗言上状(折紙)

一乗院家新座漆工影宗謹言上

為衆徒御沙汰就四一半打攤坊等御沙汰影宗罷入落書擬蒙御罪科無跡形難堪上者被止理不尽御沙汰於院家御沙汰欲被絳御糺定愁事件子細者昨日廿六日為衆徒御沙汰就落書四一半打等乃有御沙汰然而影宗罷入彼落書云々就之衆徒直仁擬蒙御罪科之間為院家寄人之由就令申天曹被止当座御沙汰歟然而猶可有御罪科之由承之条無術次第也於影宗者都以不仕之且如此勝負事身独志天非仕事所對之仁在之然者縱雖諍申上之笑仁仁之者更不可有其隱者歟而於此道者一期不存知子細之処

(所詮方)

□□今始天罷入彼

(中欠)(以下下段)

宅者依下人恒病旁

所他人之許仁僅

一等露頭也

哉早仰高察

者歟

次第也者早為被絳

副起請文恐々勒于

状粗

件

(第二紙) 覺能重言上状(折紙)

覺能重謹言上

欲早被停止笑豪無道謀計罷蒙安堵 御成敗事

夫子細先度言上事旧畢抑彼陳状云覺能於中川打四一半之時取笑豪下人德寿太郎借錢打入之畢云々先覺能打四一半云事無跡形無笑也此条尤可出申証拠証人若有帶意趣之仁於令申付無笑者早被糺明速可被行奏事不笑之罪科者也次德寿太郎借錢打入之云々此又前後相違申状也所詮何皆以謀計之企故如此相違歟只今非正旨 次同宿之上依為一和尚觸遣子細之処令存知子細歟之間不及一言返答等云々付觸遣笑豪即一和尚相尋子細於覺能之処覺能返答仕云一向之無笑也私問答不事行之上者早令言上子細 院家可仰 上裁之旨返答之間

(中欠)(以下下段)

一及大落書口覺能博奕一

一之云々此

又存外

落書之時者

詭落書聞之一

一突之落書不聞之此条

□者

山門有 御尋者

隱若有帶意趣之輩不

□科為損

人覺能博奕落書

之由令申之輩在之者

其鉢

者也不尔者胸臆

之次第也若博奕之由令

令

出來者對於件仁速可

無笑之条露頭之時者早

件仁

於重科者也不然者向

不可有尽期者早被絳

御沙

汰欲被糺明談計之有無

謹言上如件

(第三紙) 寺僧笑豪陳状(折紙)

寺僧笑豪弁申

中川住侶覺能本名定朝付借錢問致謀訴条其咎難遁子細事

件覺能於中川打四一半之時取実豪下人徳寿太郎借錢打入之畢則任借

書之旨度度雖令催促件錢於都以不致弁之間同宿上依為当山一和上以

書狀度々触遣子細之処令存知子細歟之間不及一言返答隨無教訓之儀

歟爰徳寿太郎不慮令死去畢彼子息等歟申之間執沙汰之処所從十郎云

事不存知者也然者散々申狀謀計故歟凡本人死去之後寄事於謀計如此

令申歟非無疑就中相論之法以証文為先償借物者世上法也何乍為書

可令遁避哉猛惑至也次宗

(中欠)(以下下段)

書十余通在之 年預 封天令取置之畢有御手

者也者早任道理為蒙 仍披陳言上如件

(第四紙) 持繼書狀(前欠) 二月十日

(前欠)

有縁之山水及候其外を可被差之由内々可有御申候西南院御事重

可被申伝候者勝願院へ可有御申候歟は所存之分を申 条々可然之

様可有御計候於御上洛者いさ にも可然候ぬと存候大輔法橋をも

御上洛 時為御談合可進候ハ可随仰候又 御教書も成候奉行も逗

留候て御沙汰候者十七日ニハ必愚身も京都へ可参合候此等之条々御

計候て且御沙汰候へく候且為 蒙仰 令申候 抑且大明神之御領

候且 御方重恩未代までも可申伝之由申候へと一庄申候也諸事期

見参之時候恐々謹言

二月十日

琳賢御房

持繼(花押)

(奥端宛書)

(切封)

琳賢御房

持繼

(第五紙) 持繼書狀断簡(後欠)(或は第四紙に続くか)

常令申候之間 申候き恐入候

重以脚力令申候就衆徒之僉議狀不被成下 殿下御教書候之間讃岐法

橋自京都立返参申候云々此条一庄歎申候て 勝願院殿御方へ申上候

状案為御意得相副具書令進之候此事無御秘計候者難入眼候歟御忿々

雖被推察候当庄存否大略今度ニ候之間不顧無心如此令申候若未讃岐

法橋候者御談合候て乍恐相共ニ可御吹拳候之様を計御申候哉 次十

五日以降の御上洛以前ニ縦奉行雖閑東下向候恐御上洛候て頭人御方

ニ御参候て 奉行を可待否ハ可依傍例候若奉行 替候ハ

と和田殿 殿は (以下欠)

(第六紙) 包紙

(宛書)

琳賢專当御房

(御)

(第七紙) 泉木津兩木屋預并木守等申狀(九月十二日)

いもあらひのをりかみちんし申て候よし承候未たれへもくたし給へ
らす候いかやうに候やらん大明神も大隅堺事成就仕て御悦と承候付
之候てはいそき此船お給返せられ候て浮橋渡にひき候へく候此船給
返候いてハ大明神御歸坐候とも浮橋ハ御事決定かけ候へく候早々御
沙候ていそき船を給返し給へく候

九月十二日

泉木津兩木屋預等

并木守等上

□^(塚カ)当御房

(第八紙) 札紙書

逐申

うり二範給候了御志之至返く為悦無極候く于今く悦入
候く恐々謹言

(第九紙) 札紙書

追申

来月四五日之比又御殿人可給候也恐々謹言

(第十紙) 入調舞注文(折紙)

入調舞

左 右

案摩二舞

団 乱 施 古鳥 蕙

蕙 合 進走 禿

万 秋 樂 皇仁

散 手 貴徳

大 平 樂 狛粹

拔 頭 納蕙利

(第十一紙) 秋季御八講進物送狀(弘安六年三月廿五日)

奉送 秋季御八講進物事

合三十五前加上下定

右奉送如件

弘安六年三月廿五日

上座法眼禪舜

(第十二紙) 左衛門尉某書狀(六月廿三日)

御上洛之時入見參候委細申承候之条悦存候向後者細々蒙仰可令申候
也兼又成功用途且五十貫文を用意候五十貫文御請取に人夫あいそ多
て可給候其後無御音信候之間態以飛脚令申候毎事期御上洛之時候恐
々謹言

六月廿三日

琳賢御房

左衛門尉□(花押)

(第十三紙) 某書狀(後欠)

當年長講會米未□□內且三千余足運送□由庄官參中候即□進之候納所琳賢無□違候哉隨御下知可□進濟之由仰含候也所□急可究落之由殊尋沙汰□恐々謹言

(第十四紙) 照蓮書狀(九月十二日)

会米事其後又四五十貫到来候聞伝て替錢ニ可取之由□人ノ候但先々ニこりはてゝ候又夜々怖畏候之由歟申候誠其謂候明日なと御下向候ハ即可持下之由可下知候今一兩日も延引候ハ慥御留守に諧之彼諧取な□御辺候ハ可被成返抄候歟人々の返答もむつかしく候又とく手をはなちたく候由申候能様可令相計給候恐々謹言

照
華

(宛書欠力)

（第十五紙）覺能言上狀（折紙）

被停止寺僧実豪覺門房□道沙汰令安堵子細事

者去四月比以使者実豪申云。事可返給云々存外之間以

誰レ請乎之由相尋之処使者申云以レ辺住人為縁覺田

房之錢借用之之十郎男爾令持之取畢云々重尋大寺住

人者誰仁乎之由問答之歟令口知之由罷歸畢其後使者重來云

年比覺円房之所從十郎男之四一錢於印俸房令借用而
 十郎男死覺円房之沙汰所令譴責也早也借書在之即

「興福寺維摩會料當国不足米餅等定案」紙背文書

案文書遺之可
此条先後相違申狀也初度者覺
於借用

(中欠力) (以下下段)

雖然度々被責問難堪之由返答仕罷過之處今月

廿八日差遣兩（處）使者令昂責之間返答申云所詮私問答不事行之上者早
令言上子細於院家可紉謀計之美否之旨令申畢者早被召尋子細於
笑豪欲明謀略之有無造意之趣無跡形事也凡覺能無一年十代之疇臆者
不營東作之世業乏一粒半錢之財貯者無西収之余資依何被阿党哉胸臆
之謀略也奸惡之太欺難堪之子細也唯仰縑素之鑒察者也底弱之山僧為
威勢之徒衆於被蔑如者雖一日片時難安堵者也然者非院家之御紉定者
爭令決謀計之有無乎仍愁吟之余乍恐粗言上如件